

5C15 回目キングダムセミナー20260314

賛美:

前半:16:14.46

それでは、セミナーに入っていきます。先月『再臨』のところをどう捉えるかというところをやりました。第5クールはこれまでと違って、大分、本にないことを深くやっていますので、どうでしたでしょうか？それも駆け足で随分飛ばしましたので、皆さん、どうだったかな？と思いながら、1か月を過ごしました。

そして、“今日からは【パート4】に入ります”とアナウンスしたんですけれど、どうですか？先月までのところで、何か皆さんからコメント、ありますか？あるいは、“ここはもうちょっと”、という推しがありますか？それを今日、今ここで言われたからと言って、そこに全部集中するということはできないかも分かりませんが……。LINEの皆さん、どうですか？大丈夫ですか？”質問できるほど、飲み込んでなかった”という、それもあるかと思えますけどね。18:37.85

それでは、前回の後半部分のところをちょっと振り返りながら、今日のところに入っていきたいと思います。関係である『神の国』について、前回マタイの24章からちょっと読んでいきました。ここに、重要な言葉、『もう一度、主が来られる』というところを我々が読むにあたって、その読んでいる言葉は、結構、幅がある言葉なんですよということを言いました。

ですから、この聖書をパッと読んで、書かれてある通りの情景そのものが、「あ、これが再臨というものなんだ」というふうにガッチリ受け取ると、……。まあ、読んでそう書いてあるからそう受け取るというのは、自然なことなんですけどね。だけど、『再臨』ということ、そして『主が来られる』ということ、『主がもうすでに来られた』ということ、そして『あなた方の中に神の国があるんですよ』という主の言葉を全て合わせもって、我々はどう受け取るべきか、どう受け取ることが聖書の言わんとしていることか、ということに触れたわけです。20:50.04

ですから、「がっちり私はこう受け取ってきましたし、そうします。」と言うのは、人それぞれで、いいんですよ。でも、そういう風にいろんな語られ方をしてくれていますからね。でもね、じゃあ、「自分と違うように信じている人はおかしいです」と、言っているのかと言うとね、『そこに幅がありますよ』ということを私が言いたかったんです。それによって、啓示文書・黙示文書として、聖書が我々に啓示していることを深く受け止めることができるか、なんです。21:47.81

24章の『主が来られる』ということもざっと大きく分けて2種類あります。それは、一瞬の“来る”ことではなくて、来て『滞在』して我々と『共に存在』している、いつもいるという“来る”。

そういう一つの『長い期間』を指して“来る”と言っている言葉と、本当に誰々さんが今日この部屋に“来た”“来る”というその“来る”。瞬間というものを言っている“来る”もあるんです。

でも翻訳したらどっちも“来る”なんです。なので、そのことをちょっと分かってほしいなということを行いました。23:01.50

5C15 回目キングダムセミナー20260314

それからもう一つ、『終わり』という言葉がよく使われますよね。『世の終わり』『時の終わり』・・・とかね。
 "終わり"というのね、本当に「はい、ここで完了」と言って“ピシッと終わる”という『終わり』と、一つの完成に向かって、今から進んでいくという、こういう動的な一つの“期間”としての『終わり』があるんです。23:41.82
 これ啓示文書であり黙示文書を2000年前に書かれた言葉、使われてきた言葉なんです。それも理科的な頭と文章じゃないからね。それは旧約聖書からそうですけれど、ずっと使われてきた当時の『神の思い』を人間の言葉で表していくという、そこには、理科的なキチキチとした分析というのはいらないんです。ものすごく大まかなんです。

だから同じ『終わり』という言葉でも・・・例えば、マラソンで42.195キロを走る。そのずっと先のゴールに向かって走っている。記録を出すために走っているという、それも『終わりの時』なんです。でもゴールテープを最後にパッと切る“瞬間”がある。それも『終わりの時』でしょ。文字通り『終わり』ですよ。その2通りを使うから余計にまたややこしいんです。25:07.20

・・・なんでこんな"来る"や"終わり"というのを、今私たちが改めて捉えないといけないかというのと、「キリストの再臨がいつあるんだ。どうなんだ」と、議論する時、それってほとんど理科的な頭でしょ。今は、2026年だけ、これって昔から、「キリストが来られる」という大騒ぎな時があったんです。記録によく残っているのは、アメリカで1834年だったかな？それって、旧約聖書から緻密に計算していったらこうなるんだという計算が出ていて、ほとんどの人はそれに賛同して、もう今か、今かと、みんな朝から家の外に出て聖書を胸にして、待っていたという時がありました。これ、1800年代の明確な出来事です。それから1900年に入っても、何回もあった。この日本でもあったし、・・・そういう「いつなんだ。何年なんだ」という頭がどうしても働くから、『終わり』と言っても、「本当は、幅があるんだ」ということ。「啓示文書の心得が、私たちに必要なんだ」ということなんです。

27:03.41

ですから、マタイ24章のここで、いっぱい使われているんだけど、・・・3節[イエスがオリーブ山で座られると弟子たちが密かに身元に来て言った。「お話しください。いつそのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」と。

・・・『あなたの来られる時』これは、来られる瞬間の時じゃなくて、一つの『期間』のことを言っている言葉なんです。マタイ28章20節で、イエス様は『・・・見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます』といわれましたよね。でも、[あなたが来られる時]と言っても、もう来てるじゃんね。つまり、これは、もっと、もっと濃厚に、イエス様の栄光がこの世に現れるということを期待していることばなんです。20:07.44

「いつそのようなことが起こるのですか」と、「あなたの“来られる時”や“世の終わり”には」というこの『終わり』も、その一つの『期間』を設ける終わりです。「それはどんな全兆があるのでしょうか」と。それが分かれば、安心出来ますよね。こういうふうに、例えは、幅を持った表現がされているということなんです。

それで、マタイの25章の例え話も読みましたよね。ここのところをもうちょっと詳しくという質問もありました。ですから、ここに入りながら今日の【『関係』である『神の国』】というところにスムーズに入れたらなと思います。29:57.48

5C15 回目キングダムセミナー20260314

ということで、マタイ 25 章ですが、ここも、例え話が 24 章から続いている。この『再臨』というか、『世の終わり』の時代のことを言っている中で、皆さん、何回も繰り返されているんだけど、24 章 25 章で、キーワードというがあるのが、わかりますか？どうですか？キーワードが、何回も散りばめられているんですよ。

例えば 24 章の 36 節[ただし、その日その時がいつであるかは誰も知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます]。それから 42 節[だから目を覚ましていなさい。あなた方は自分の主がいつ来られるか、知らないからです]それとか 24 章の 50 節[そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます]それとか 25 章の 13 節[だから目を覚ましていなさい。あなた方はその日その時を知らないからです]・・・何でもご存知のイエス様も『知らない』と言っている。父の心を子に映されておられる。33:19.98

そしてイエス様は弟子たちに大概語っておられるのに、[その日その時は誰も知らない]と。この黙示文学的な意味をどう思いますか？その日、その時を見破るといふか、計算するよりも、もっと大事なこと、確固たる真理があるんですよということでしょう。

『その日その時を知るということよりもっとあなた方に大事なことがある。』・・・イエス様は父からもそれを教えてもらってないということに、イエス様も大満足しておられる。なぜかならば、『それに変わることをイエス様は父との間で持ってるから。あるいは『弟子たちとの間に持ちたい』から。34:45.48

これってね、非常に、意味深なキーワードなんです。だけど、人間の心というのは、追求したい探求したい、「我こそは知りたい」という思いがあるでしょう。けれどね。このキーワードを受け取る時に、私たちは、「じゃあ、もっと大切なことを自分は掴んでいるだろうか」といふ、そこをここで例え話をいくつも重ねて、話してるわけです。35:46.86

(マタイ 24:37)[(人の子が来るのは、ちょうど)ノアの箱舟の日々のようだからです]なんです。で、その日々の中で同じように起こるんですよ。だから 42 節[目を覚ましていなさい。(あなたがたは、自分の主が)いつ来られるかわからないからです。]

44 節[だからあなた方も用心してなさい。人の子は思いがけない時に来るのですから]という、この『人の子』の意味するところも言いましたよね。イエス様しか人の子と自分で使わない。誰も「人の子、人の子」と言っていないのに、イエス様だけが自分のことを『人の子』と言っている。これは旧約聖書の中にいっぱい出てくる『人の子』のことを言っているんだけど、特にイエス様が言っているのは、ダニエル書 7 章。ここを皆さんに詳しくどうぞお読みくださいね。ダニエル書の 7 章 13 節の[・・・人の子のこのような方が天の雲に乗って来られ・・・]というのは、はじめ『人の子』のような方が下ってこられる。それは、『治める』ため。そして、すべての『権威』、『力』、『権能』を与えられてと言っている。ところが、幻の意味がわからなくなったダニエルは、その幻の解き明かしというものも見ています。それは、その天から雲に乗って下った『人の子』に与えられている力、権能、能力、治めることのすべてを誰に与えたかって言うと、『聖徒たち』に与えていると言っているんです。38:13.08

5C15 回目キングダムセミナー20260314

『人の子』というのは、このように、たった一人の単体のことをだけを厳密に指しているわけではない。理料的に。『人の子』という場合、・・・これ、すでにセミナーでも説明しています。『集合人格』です。『イエスを頭とする聖徒たちの群れ』のことです。

だから、イエス様がここで『人の子が来る』と言っているんだけど、皆さん、イエス様が勿論、一人を指して『人の子が来る』と言っているんだけど、その深い概念の中には『集合人格』があって、イエスに似たものとされて、イエスに繋がれて、イエスと相互に内在している、そして存在している聖徒たちがやってくる、現れてくる、という深い概念がそこに含まれている。39:44.69

だから、そのための心の準備。そのための期待、待望というのは、何かというと、それは、「天から何かがやってきて、私たちは完全受け身で、待っていればいいのよ。ウキウキ」というのではなくて、「私たちも、もっと変えられていくんだよ。あなたという人も、もっともっと変貌させられていくんだよ。栄光から栄光へ。主に似たものとなるために。主の姿になるように。あなたも変えられていくんだよ」と。

だから、耳でこれを聞くんじゃないんですよ、皆さん。自分の胸を叩いて・・・この私もなんですよ。周りのみんなをキョロキョロ見るのではなくて、胸を叩いて、この私も変えられていくんです。41:14.34

だから 45 節の例え[主人から、その家のしもべたちを任されて、食事の時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは一体だれでしょう。]46 節[主人が帰ってきたときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。]・・・何を言っているんですか？これ、どう思いますか。この例えをスラッと読んで、「ああ、気をつけなくちゃな」というぐらいで通り過ぎやすいんだけど、これってね、この 45 節の例えは、25 章に行ってもずっと下地で生きてるんです。

47~51 節[誠にあなた方に告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。ところがそれが悪いしもべで、主人はまだまだ帰るまい」と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰ってきます。そして、彼を厳しく罰して、その報いを偽善者たちと同じようにするに違いありません。しもべはそこで、泣いて歯ざしりするので成り手はぎざりするのです。]・・・こういうラストの書き方って、ものすごく、審判と裁きですよ。で、ここだけが重く、重く印象に残りやすい、とすると、この根底に初めから言いたいことを受け取れていないからですよ。それで 25 章を見てください。

25 章の 1 節に、[そこで、]という言葉がありますよね。それは、45 節は、今読んだ 24 章の例え話の続きですよといっているんです。全く別個の例えをしているんじゃないんです。『そこでね』って、イエス様がさらに詳しく深く突っ込もうとして言っているということです。

25 章 1 節続き[天の御国は例えて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです] 2 節[そのうち五人は愚かで、五人は賢かった] 3 節[愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった] 4 節[賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物といっしょに油を入れて持っていた] 5 節[花婿が来

5C15 回目キングダムセミナー20260314

るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた]6節[ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声が出た]7節[娘たちはみな起きて、自分のともしびを整えた]8節[ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。「油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』]9節[しかし、賢い娘たちは答えて言った。「いいえ、あなたがたに分けてあげるにはどうも足りません。それよりも店に行って、自分の油をお買いなさい。』]10節[そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。]11節[そのあとで、ほかの娘たちも来て、ご主人さま、ご主人さま、あけてください』と言った]12節[しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなた方を知りません』と言った]13節[だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです] 46:41.46

・・・有名なこの例え話なんですけど、なんかこれも最後がちょっと衝撃的に受け取れますよね。ところが、前回言いましたけれど、12節のところ、最後の「確かなところ、『私はあなたがたを知りません』と言った」このところ、『私はあなたを知りません』という、「知らない」という言葉も、これも幅があって、みなさんあんまり聞いたことがないみたいなんです。

その『知る』という言葉には、ちょっとした目で見えた知識・情報として「知る」というレベルと、もう一つ、しっかり、そのことの本質、深みを感じ取って、そして相手を「知る」という意味の『知る』があります。47:49.14

この25章12節のこの主人が言った「あなたを知らない」というのは、目で見えた情報として、「あなたを知らない」と言っています。48:26.46

新約聖書に『知る』というのは、沢山あって、いっぱい使われているんですけど、厳密な意味でなく、二つが混ざり合って使われている形跡もあるんです。多くの場合は、今言った二つに分けられています。

手元に聖書がある方は、見ていただけると良いのですが、もっと深く知ると意味の『知る』は、どこにあるかわかりますか？例えば、ヨハネの福音書の10章14節に「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています」・・・]という、これが、もう一方の『深く知る』という箇所です。所謂「『我と汝』で神様があなたを知っておられますよ」[わたしは、わたしのものを知っていますよ]というその『知る』です。

それから同じ10章の27節「わたしの羊は、わたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています」・・・これは、マタイの25章で使われている『知る』というのと違うんです。そのレベルじゃないんです。「わたしは彼らを知っています」という『深く知る』の方です。

皆さん、主は私たちがこのように「知っておられる」。「知ろうとしておられる」んです。だから、私たちが主に向ければ、我々はもっと、もっと、主と『私とあなた』で知り合えるんです。主が、胸の前まで来てくださったんです。遠慮しないで、胸と胸とを合わせて飛び込めばいいんです。 51:20.20

次に、マタイの7章を開いてみてください。今日はあちこち引きますけど大丈夫ですか？

5C15 回目キングダムセミナー20260314

マタイ 7章 21 節から読みましょう。文脈がわかりやすいのでね。21 節[私に向かかって。『主よ、主よというものがみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです] 22 節[その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇跡をたくさん行ったではありませんか』] 23 節[しかし、その時、わたしはあなたがたを彼らにこう宣告します。『わたしはあなた方を全然知らない。不法をなすども。私から離れて行け』・・・これ、どっちの知らないだと思いますか？これは、『我と汝』の『深く知る』という言葉が使われているんです。だから、これってね、『わたしはあなた方を全然深く知らない。だから、不法をなすものども私から離れていけ。』と、言われているのですよ。でも、預言をしていたんでしょ。悪霊を追い出していたんでしょ。奇跡もあったんでしょ。だけど、主はこの時、厳しく『あなたを知らない』と言っているんです。54:01.25

この話の前の 20 節[こういうわけで、あなたがたは実によって彼らを見分けることができるのです]・・・まあ、この段落の初め 15 節に、[にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやってくるが、うちは貪欲な狼です] 16 節[あなた方は実によって彼らを見分けることができます]・・・イエス様に全然知らない、深く知らないと言われたのがイエス様の側からの最後の言葉だけど、これによって断罪されたというか、放り投げられたというんじゃないでしょ。初めからそういう木だったからそういう実がなっていたと。

ということは、天におられるわたしの父のみこころを行うというのは、どういうことなんでしょう。そういう誰にも見える、人が驚くパフォーマンスのことじゃないわけですよね。マタイの 7 章の 23 節でイエス様は、『我と汝』の『深く知る』という言葉で、"知らない"を使っておられるんです。

はい、では、25 章に戻ります。

マタイの 25 章の 12 節で[・・・『確かなところ、わたしはあなたがたを知りません』と言った]のは、

・・・単に情報として『知らない』という意味でした。そしたら、何を知らなかったんですか？

皆さん、この例えの設定は花婿が花嫁を迎えに行く当時のユダヤの社会の風習そのままを取り上げておられる。どうやら昼間じゃなくて、夜迎えに来ることが多かったらしいんです。だから夜真っ暗ですから。今のように街灯はありませんよ。街灯も何もないから、花嫁たちは、あるいはそれに仕える人たちはみんな、灯火を待ってないとわかんないわけです。花婿からは花嫁が見えないんです。

ところが夜になって、花婿が遅れた。いつ来るかわからない。花婿が遅れたので、娘らは 10 人とも眠くなった。で、寝ていると『迎えに出よ。花婿だ』と声がしたと。十人とも娘たちはみな飛び起きて自分の灯火を整えた。ところが愚かな娘たちは賢い娘たちに言った。「油を少し分けてください。私たちの灯火は消えそうです」と。

・・・いいですか。「消えそうです」と言っているということは、十人とも慌ててつけて、一旦ついていたんでしょ。十人ともつけていたわけよ。

ところが、賢い娘たちは「いえ、いえ足りません」と。「お店に行って、自分のを、お買いなさい」と言った。・・・「これ、ちょっと冷たいね」とか「みんなで分けてあげたら？」という感想も出る。58:24.42

5C15 回目キングダムセミナー20260314

で、その間に花婿が来た。用意ができた娘たちは彼と一緒に婚礼の祝命に行き、戸が閉められた。だから、この時ご主人様開けてくださいと言ったけど、『あなたを知らない』

・・・というこの"知らない"というギリシャ語は、『オイダ』「οἶδα」という言葉なんです。それから、深くあなたがたのことを『我と汝』のように知らないというのはギリシャ語で『ギノースコー』「γινώσκω」と言うんです。

だから、『知る』ということばにも『オイダ』と『ギノースコー』があるんです。それで、こっち(25:12)は『オイダ』なんです。なんか、『オイダ』って我々が聞いたら、日本語的印象的にも軽いでしょ。59:23.89

要するにね、灯火を持っていた 5人は見えたけど、灯火を持ってない人は、花婿からは見えなかったと言う事なんです。だから、『オイダ』なんです。この古典ギリシャ語で調べられる方は、調べてご覧になったらわかると思います。この『オイダ』という言葉は、『見える』という意味合いの言葉を語源としてできた言葉だそうです。だから、あなた方を私は見なかった。見えなかった。 1:00・14.52

つまり、自分は花婿を待つために灯火を持って、待っていたんでしょで、十人とも同じように寝ちゃったわけよ。眠たかったら、寝ることが悪いんじゃない。

起きて灯火を一度ともしたけど、その花婿と「向き合いたい。」「もっと知り合いたい。」『ギノースコーをした

い』という、そっちの思いが足らなかったと。それが賢い娘と愚かな娘という紹介されている油の差だといえます。

[この天の御国は、例えて言えば、灯火を持って花婿を出迎える賢い 5人の娘のようです]とは言ってないんです。ここを、しっかり初めから抑えてください。これね、この十人が『天の御国』だと言っているんです。そうでしょ。

どう思いますか？「え？だって、戸の外に出されちゃったじゃん。」と言いますか？つまり、この例えの真髄は、わたしの話、言葉を聞いているあなたの内に、賢い 5人と愚かな 5人がいるのです。あなたの内にしっかり灯火を灯して、「主をもっと知ろう。主にもっと知っていただきたい。」という熱い煮えたぎった熱々の心があるあなたの内なる 5人と、「もういいかな？この程度で」と思ってしまうあなたの内なる 5人がいます。だからね、目を覚ましていなさいと言われてるんです。 1:02:58.86

そしたらばね、『ギノースコー』として、『あんたたちを全然知らない』と言って、跳ね除けたんじゃないくて、『オイダ』で、あなた方が見えなかったと言うのであれば、そうであればですよ。戸の外から「主よ主よ。戸を開けてください」と言われたら、「ああ、あんたたちいたのね」と言って、開けてくれたらいいじゃないですか。なんで閉めてしまって、その後のことは書いてないんですか？それって、やっぱり裁きじゃないの？冷たいんじゃないの？と思ってしまう方がいらっしゃいます。 1:03:52.62

そこが、こういうイエス様の例え話の黙示文学的な妙なんです。つまり、花婿がランプを持って照らして探したんじゃないんですよ。花婿が懐中電灯を持ってきてパーッと照らして、花婿としたら見えた。あ、この人かって。見えるのは、何人いる・・・というのじゃないんですよ。

5C15 回目キングダムセミナー20260314

それは花婿は来るんですけど、着たいんですけど、待っている側の『応答』が大切なんです。待っている側の向き合った応答として、ランプを持って「花婿よ、ここに私がいます。見てください。」というその渴望の心がどうしても必要なんです。1:05:02.64

その待っている、「ここにいますよ」という、その心を期待されているわけ。だから、「あ、あんたたち、いたんだ。じゃあ、入んなさよ。」じゃ、それ、まずいでしょ。

[この戸が閉められた]というのはなんか厳しい裁きのように感じるとしたら、それ間違いなの。それこの戸が閉めたってというのは花婿の花嫁たちに対するいわば自分の心の決心なんです。自分の情熱の現れなんです。

だから知りません。(オイダ)。「あんたたち、見えなかった」と言った後で、ここで結論として、[『目を覚ましていなさい。』あなた方はその日その時を知らないからです。]・・・わかるわけないからです。あなたがたは、父じゃないからです。わかんなくていいんです。でも自分の内側で、火灯を照らし、「主よ、来てください。私を見てください。今」と言って待つのです。

だから、いい？花婿が来た瞬間にポッと照らすんじゃないんですよ。花婿が近づいているという時に、ここにゴールした瞬間につけるんじゃないくて、近づいているというその時に、その期間に、灯火を照らして自分を照らしておく。こういうことなんです。

だから、これって、主の我々に対する『向き合いの決心』とあなた方の『内なる灯火を頑張れよ』という“愛と励まし”が込められている例えなんです。「あ、最後の審判、こうやって閉じられちゃうんだ。私どっちにいるんだろ」なんてそんなことを、もやもや考えてる暇があったら、この深い黙示文学の意味を思い巡らした方がいい。

1:08:20.48

その続き、いいですか？その次の例えがやってきます。

25章14節[天の御国は、・・・]・・・これも、もう皆さんよく知っているタラントの例えです。でもね、ここで25章の十人の娘の例え話の後に、すぐにきていますけれど、14節の初めの[天の御国は、]と、ここで入れてあるこの言葉は原文にはありません。ないんです。何故か？それはね、十人の娘の例え話とまた別に、「天の御国は」と言ったのではなくて、十人の娘の例え話の続きとして、さらにもう一歩また説明しようとして言ってるわけなんです。だけど、翻訳するときには別の例え話が始まるから、やっぱり「天の御国は」でしょうということ、つけたんでしょうけれどね。このタタラントの例え話は、十人の娘の例え話の続きなんです。

だから、このタタラントの例え話をさっと見てみましょう。

25章14節[天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです]15節[彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた]16節[5タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。17章[同様に二タラント預かった者も、さらに二タラントをもうけた]18節[ところが、一タラント預かった者は、出

5C15 回目キングダムセミナー20260314

ていくと、地を掘って、その主人の金を隠した]19節[さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした]20節[すると五タラント預かった者が来て、もう五タラントを差し出して言った。「ご主人さま。私に五タラントを預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントをもうけました。」21節[その主人は彼に言った。よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ]22節[二タラントの者も来て言った。「ご主人様、私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントをもうけました。」23節[その主人は彼に言った。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたはわずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」]24節[ところが一タラント預かっていた者も来て言った。「ご主人様、あなたはまかないところからところがかないところから刈り取り、散らさないところから集めるひどい方だと分かっていました。25節[私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です」]26節[ところが、主人は彼に答えて言った。「悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かないところから刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか]27節[だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば、私は帰って来た時に、利息がついて返してもらえたのだ]28節[だったら、おまえは私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ」]28節[だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。」29節[誰でも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っている物までも取り上げられるのです]30節[役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて激ざしりするのです]1:13:31.62

・・・これも「最後、厳しいな」という印象を持ってしまうですが、十人の娘の例えの後にさらにこう言われたと。財産を預けて旅に出る主人。能力に応じてタラントを委ねた。一人ひとりの中に、主人は任せて、預けた。そして、五タラントの者と、二タラントの者に後で言っているように、[主人の喜びをともに喜んでくれ]と、同じ言葉が繰り返されます。1:14:08.16

つまり、タラントというふうに、いわゆる金銭的なもので例えていますけど、このいわば主人が大切にしていたもの、主人の心、主人の喜びを、三人に託したということが言える。

で、主人の心を、自分の心とした二人は、その心で動いたんでしょう。生きていったんでしょ。ところが最後の一人は主人の心をどう受け取ったか。[蒔かないところから刈り取り、散らさないところから集めるひどいお方だと分かっていた。私は怖くなりました。]と言っている。・・・前の二人は主人の喜びを受け取って生きていったのに対して、三人目のこの最後の一人はひどい主人として受け取った。「神様はひどいお方だ。冷たいお方だ。そして、遅いお方だ」と。「隠して待っているのにいつまでも帰ってこないじゃん」と言って。

「花婿は遅く、ひどく、冷たく、私には怖い人だ」という、この心がね、神様と『ギノースコー』させないんです。『オイダ』で終わってしまう。

主と『ギノースコー』する、深く『我と汝』で、「向き合おう、向き合おう」と前に進んでいく心は、主人の喜びを、自分の喜びとし内側に持っていく。つまり『相互内在』『相互内住』を持っているんです。1:16:39.84

だから、この最後のことばを、「主がひどい方だ。怖い方だ。」というその心が、自分のギノースコーしようとする燃える心に水をぶっかけてしまう。

5C15 回目キングダムセミナー20260314

そうすると、自分が主に対して、応答できない。自分が向き合うことに対して、冷めてしまう。そこに、神様が求める『御国の関係性』を生むことがないんです。進むことができないんです。

自分の中に、深く根に持っていた『偏見』というものを打ち砕いていく。自分の腹の底の頑固な偏見。この自分の『我』というものを打ち砕く勇気が必要なんです。

向き合う時には、自分の内なる頑固な、頑固な偏見を打ち砕かないで、「神様は、何もしてくれない」「祈っても、どう話しても、・・・どうだこうだ」と言って、まがまが、忌まわしく思ってしまう。そのところを行ったり来たりしてしまうんです。1:18.34.92

だけどね、神様を関係性で知る『ギノースコーする』という油が、足りない 5 人の娘であっても、神様はその娘に対して何て言ったか。「わたしは、あなたについては情報として、知らない『オイダ』。『見えないんだよ』と、言っているだけじゃないですか。私はあなたを『ギノースコーをしない(知らない)』と言って、ないんですよ。

1:19:08.76

だから、あなたの内なる 五人に対して、神様はあなたの内なる灯火が消えかかったその 五人が見えるようになることを待っていらっしゃるんですよ。

神様はあなたをギノースコーしている。神のギノースコーに対するあなたの『応答が完成する』のを待ってられる。1:19:51.71

そして、戸が閉められるのは、その決意の現れ。この 2 番目のタラントの例えでも、持っているのならどんどん豊かになる。でも、それを持たないんだったら増えないよと。何が、そのチェンジのキーワードか。それは、自分自身の頑固な凝り固まった『偏見』を、もう自分でハンマーで打ち叩くことです。

私たちの『我と汝』のこの関係ってね、固定化できないからね。

「はい、私、主と『我と汝』の関係です。ハレルヤ！」と、今日、今、言ったとしても明日、何がそれを保証しますか？明日は明日です。次の瞬間は、次の瞬間ですよ。誰もそれを固定化できないんです。

だから『我とそれ』になってしまう危機をいつも察知しながら、我々は、主との『関係性の完成』を目指して成熟を続けていくんです。その一瞬一瞬なんです。その『カイロス』なんです。そして、その『アトモス』なんです。主との『時間』なんです。1:21:39.12

さてさて、もうちょっと推し進めますよ。

31 節[人の子が、その栄光を帯びて、全ての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位につきます] 32 節[そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、] 33 節[羊を自分の右に、山羊を左に置きます。34 節[そうして王はこの右にいる者たちに言います。『さあ、わ

5C15 回目キングダムセミナー20260314

たしの父に祝福された人たち、世の初めから、あなたがたは、わたしが空腹だったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いている時に、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、私に宿を貸し、]36節[わたしが裸のとき、私に着るものを与え、私が病気をしたとき、私を見舞い、私が牢に行たとき、私を訪ねてくれたからです。]37節[すると、その正しい人たちは答えて言います。]38節 [主よ、いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べるものを差し上げ、渴いていておられるのを見て飲ませてあげましたか。]38節[いつあなたが旅をしておられるときに泊まらせてあげ、裸なのを見て、着せるものを差し上げましたか。39節[また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、お尋ねしましたか。]40節[すると王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』]40節[それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『呪われた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ、]42節[おまえたちは、わたしが空腹であった時、食べる物をくれず、渴いているときにも飲ませず、]43節[わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。]44節[そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話しなかったのでしょうか。』]45節[すると王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちがこの最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、私にしなかったのです。』]46節[こうして、この人たちは、永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。』1:24:27.84

・・・どうですかこの例え。三つ、トントンと続けて読んでいっていますが、これがイエス様が『再臨』についての弟子の質問に対して答え、そして語り続けた例え話なんですよ。

この後、いよいよ十字架の時に入るんですが、ものすごい大きなクライマックス、十字架という大きな、大きな昇天の出来事の前に、丁寧に24章25章がきているということが、わかるでしょう。

で、三つの例えが進むうちに、この最後の表現、[永遠の刑罰に。永遠のいのちに。]という、これがだんだんと、きつくなっていく。強烈な表現になっていくんです。

なぜかという、34節 [世の初めから、あなたがたのために備えられていたんです。] 神の国で。この関係性の世界で。それを完成しますから。1:26.00.79

ここではなんと、神様とか、主人とか花婿じゃない。ここで両方の人が同じこと言っています。いつ、私たちはあなたが空腹なのを見て、食べ物差し上げましたか？渴いているのを見て飲ませましたか？いつそんなことをしましたか？してないじゃないですか？と両方がそう言っている。覚えてないわけよ。だってなんか善い行いをしたらポイントになってポイントが溜まって、天国に行けるんだったら、みんな覚えてるでしょ。スマホにもちゃんとポイント貯めてね。だけど、そう、なんか、ここおかしいんですよ。「あなたにそんなことしたことはないです。」でもイエス様は、私の兄弟に、この小さい者たちにあなたがしてきたということは、すなわち私にしたんだよ』って言うわけ。1:27:28.32

それは、主との関係性を問題にしてきたんですよ。主人とか花婿とかね。でもね、もっと押し進めていけば、主との相互内在はあなたの身近にいる人、周りにいる人との相互内在ですよ。神の国の関係性は、私とあなただ

5C15 回目キングダムセミナー20260314

けに、留まらないんだよ。あなたと関係性を持っているならば、あなたの内側から、また、あなたの隣人、あなたの兄弟、あなたの周りの人たちの関係性の中に、それが培われてはいくんだよ。そこに、神の国の見える化があるわけ。

そこから、神の国というものの中に生きるものは、主との関係性はそのまま、共同体の関係性の中に滲み出てくるんです。だから、主と交わっているのと同じ濃厚さとレベルで。

我々の周りの関係性の中にあるキリストに気がついていかなんです。

私が何回も言葉で言いましたように、

我々が互いに会おうとき、互いに相手の中にある『永遠の汝』に、気がつくようになるんです。

それはその人がどんな癖があり、どんな形、どんな有り様であったとしても。

神様がその人に期待している、その人を見ている見方で、我々は互いにその人を見て、その人を発見するんです。

「ああ、この人って。」と。「あなたは永遠の汝。あなたの中に私は見えます。」・・・こうやって、神の国の共同体は築き上げられていくんです。 1:30:28.20

この 24 章、25 章ってどうですか？非常に、丁寧に、巧みに言葉が綴られているんです。

『神の国は、あなたがたの中に在る』

『あなたがたの間に在る』

『神の国は、あなたとあなたのそれぞれの間にあるんですよ』

と言っている。そこにね。あなたと神との関係性の深さが現れている。

しっかり、掴んで、ちょっと、休憩に入りましょう。はい、じゃあ前半は、それで終わって、後半は、いよいよ本の方にも入りながら深めていきましょう。では、休憩に入ります。

後半

はい、後半を始めます。ラインの皆さん、どうでしょう。今の前半の部分で、なんか質問コメントありますか？ありましたら、おっしゃってください。大丈夫ですか？

5C15 回目キングダムセミナー20260314

はい、先ほどの例え話のところをサーッと早口で読んできましたけれど、一番最後の例え話が厳しいように受け取り、なんか怖いように感じますか？もう一度、くれぐれも重要な部分ですので、黙示文学の言いたいことを受けとってください。その一つ一つの具体的な善行のチェック、いいことをしてるか、あの人もこの人もという、そういう具体的な行為をどうのこうのと、そこばかり、自分の頭に置くと、中心的なところがぼやけてきますので、そういうことではなくて、黙示文学の言いたいことを受けとってください。

先程の 25 章 32 節の例えの始め[すべての国々の民が御前に集められます。彼は羊飼いが羊と山羊とを分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に山羊は左に置きます。]

・・・というこれも、分けているんですよ。分けた後の話ですよ。もう分けてあるんです。こうした、ああした、というのは、完全に昔の話で、分けた後で、あなたは羊の側の人に、あなたはこうこう、こうしてくれたと言っているわけで、山羊の側の人に、あなたはこうこう、こうしなかったというね、・・・だから、これは結果であっていわゆる「実」なんです。 3:15.90

[良い木が良い実を实らせます] (マタイ 7:17) ・・・ですから、良い木というのは何ですか？

それはこの十人の乙女の例えの中に、タラントの例えの中に、その秘訣が書かれてあって、その心が書かれてあるわけ。その書かれてあるその木によって生きて、そして実っていく実がありました。

だから、この実をここで見て、分けているというそういう時ではありませんから。もう、すでにそういう人はそういう実を实らせます。神の関係性の中に神の国は滲み出てきていますと。だから技術的にというか、わざとらしく、「あら、ここで、こういういいことをして、ポイントを稼いでおこう」とか、「こういうことをやった方が、自分はポイントゲットだ」と、そういう条件でやるんだったら違うでしょ。

大切なのは、「私は、そんなこと、考えていませんでした」と言って意識せず、わざとらしいパフォーマンスでもなく、滲み溢れて来るものの結果の実として、「あ、こんなに実の中に私はいるわ」と、しみじみと変えられるということですよ。

5:20.82

だから、この 三つを最後の結末のなんか分断、そして叱りつけ、それから裁き・・・そればかりを念頭に置きながら読むということは、この黙示文学の言いたいことを受け損なっています。

もっと我々の本質の励ましであり、私たちの主との向き合いの激励であり、招きであり楽しみなんです。

だからこの 三つの例え、四つの例えを読んで、「ヨッシャー！これでいきましょう！」とウキウキという思いが正解。見せかけの祈りや神への行い、人への行いではなく、我々の内にあるものが現れてくるんですよ。このパルシアの濃厚な時代に。あなたの内にあるものが全部外に出て現れていくんです。ね、はい。よろしいですか？

7:25.56

5C15 回目キングダムセミナー20260314

さて、じゃあ、今日のところをさらに進めていきたいと思います。

本を読んでいってもいいんですけど、どうぞ皆さん、本をゆっくりじっくり読んでください。ぜひね。

これまで、簡単な言葉で『**神の国は関係性**』だと言ってきていますけれど、えーとちょっと初めから、もう一押し、したいことがありますので、話させてくださいね。

あのね、この第5クールの始めにも、創世紀の1章2章3章、4章あたりまで詳しく読んだと思いますけれど、そこをもう一度、おさらいして、さらにちょっと見ていきたいところがあるんです。[**神様が人を造った**]。というのは、もう周知のことなんですけど、・・・ちょっと、じゃあ聖書をお持ちの方、創世紀のところを見てください。10:10.23

創世紀の1章26節には、[**さあ、人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて・・・**]

・・・ここは、[**神様のかたちとして**]という言葉と[**神様に似せて**]という言葉が二重で表現されているんです。そして、この[**神様のかたちとして、似せて造られた**]ということでもって、2章6、7節では[**その鼻にいのちの息を吹き込まれた**]とさらに詳しく表現されています。重複してこの表現が使われているのがわかりますよね。

12:35.66

1章26節は神様の告白として、『**われわれのかたちに人を造ろう。我々に似るように造ろう**』と言われて、27節は[**神はこのように人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し・・・**]と繰り返されているじゃないですか。それは、26節で、神様が始め、言葉で告白したいわば神様の決心を表現しています。そして、実際に行動されたのが27節。つまり、**26節は仰せられたんです。27節は創造されたんです。**

だから神のかたちに、いかにそっくりに似せて造ったかという、神様のこの重複表記は強調なんです。もうズバリ何回も出てくるというのは強調だと、ヘブライ語を勉強している方はそう、聞いていますよね。

で、ここで27節なんですけど、ちょっと訳を変えているところがあるんです。これも前にちょっと触れましたけど、もう一度、重要ですから見といてください。15:04.44

27節[**神はこのように人をご自身のかたちに創造された**]と書いてありますが、これも、ヘブライ語の対約聖書を持っている人、ヘブライ語の聖書を持っている人はよく見てください。[**人をご自身のかたちに**]という『**ご自身のかたち**』という言葉、わかりますか？(参加者に)対訳聖書、ちょうど持っていますね。読めますか？ そう、『**ベツァルモー**』です。『**モー**』という語尾は、『**彼の**』という意味です。[**ご自身のかたち**]というところは、『**ベツァル**』でしょう。だからここの意味は、『**人をご自身のかたちに**』と訳してあるけど、原文そのまま忠実に読むと、[人を彼のかたちに創造された。]なんです。

・・・この『**彼**』って、誰ですか？ 神様とも読める。でもね、これ、『**彼のかたち**』にというのを、人(アダム)を、アダムのかたちに創造されたんだ。とも、読める。17:05.74

5C15 回目キングダムセミナー20260314

アダムに対しては、『アダムのかたち』という、こういう『あなた』という『あなたでなければならない』というかたち』があるんだ。そしてその『かたち』というのは、『神のかたち』なんだと。そうとも読めるという話です。

このどちらの読み方も取れるということで、その『彼の』という言葉、「これ、やっぱり神様だろう」ということで、[ご自身のかたちに]と、神様が造ったように受け取って訳してあるんです。それもいいですよ。そのままでも、もうちょっと、じっくり見たら、このちょこちょこっと変えた語り方というのが、妙じゃないですかね。

だから両方受け取っいたら、いいんです。何を私がここで、もっと言いたいかということ、ここには、神様が人を造った時の人の絵に対する期待感。人に対する思いの深みがあるんです。 18:52.26

だから、28節を見てください。[神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『産めよ。ふえよ。地を満たせ。地に従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ]

・・・なんですか？これは。神様は、“人”に何を期待したのか。[それは神のかたちだったんだ]という『神のかたち』に造って。19:51.89

26節のところに、まず、それはあったんです。26節の最後、[・・・地をはうすべてのものを支配するように]という神の決心。神様の熱望がそこにある。で、実際に造って、また同じように『支配せよ』と言っておられるわけです。この神様の言葉は深いんです。伊達に言っていないんです。「あ、は一」と過ぎていいものではないんです。20:44.88

この人間に与えられた立場、神様の期待。何よりも神の息を、自分の中にとどめ置いているという、この『関係性』ってどうですか？皆さん。神様は、神と人とがどういう関係性で生きることを原始の初めに、期待しておられたのでしょうか。この『初めのアダム』というのを、しっかり納得することが、大事なんです。これをなくして創世紀の3章に行くことなかれです。22:09.50

だからね、創世紀のこの1章、そして2章というのは、とっても重要なところなんです。で、初めのアダムというものの神との関係性を一旦しくじるんです。失うんです。それはもうよくお分かりですよ。

だけど、初めにあったアダムの姿は、・・・ここでね、「人間は、この時正しかった」とか、「罪がなかった」とか、「聖かったんだ」とか言うんです。・・・そうなんですけど、それとともに、まず神様がご自分で言って、そしてそれを繰り返して強調しているのは、『支配』という言葉。『治める』という言葉。「これって、神様がすることじゃないの?」と思ってしまうけれど、聖書はそんなこと全然臆せず、神様はこう言うんです。23:40.02

つまり、ここにね、神様の『代理的な使命』、神様の世を『治める』とか『支配』と言う言葉が、皆さんの中で、ちょっと厳しく荒々しく感じる人は、他の言葉に変えたらいいんですけどね。・・・聖書がもちろんそれを変えていますけれど、神様がこの『世を愛する』。この世を神の愛でケアする。神の愛で治める。神の配慮で、この世を造り

5C15 回目キングダムセミナー20260314

上げていく。そういう『神的使命』『王的使命』とか、・・・これをキングダムセミナーの本の中では、『王権』と、簡単に言っているんだけどね。

だからこの『神の使命』と『王権のパートナー』として人が造られ、主とともに生きる。歩む。共に築いていくという、初めの意気込みが、神様の『決心』と『行い』が、あったんです。

それで、神はこのように人をご自身の形に創造されたんです。

(参加者に)ヘブル語聖書を持っているから、(ヘブライ語で)原文を読めるよね。この 27 節だけをちょっと読んでくれる？ [神はこのように人をご自身の像(彼の像)に創造した。神の像に彼を創造し、男と女とに創造された]

・・・はい、ありがとう。27:07.02

ここで、人を『造ろう』、『造ろう』とありますけど、『造る』という言葉には、神様が主語の『バラー』と、もうひとつ、神と人が主語になる『アーサー』という言葉があります。創世紀 1 章 1 節のバラーは神様が主語でない無理なんです。使えない動詞なんです。ところがもう一つの『造ろう』というのは、『アーサー』なんです。「ヤース」なんです。これは、人が主語でもいいんです。

神様は創世紀で、主語が神様でなければならない『バラー(創造する)』と人も使える『アーサー(造る)』を、混ぜて使っているんです。それって、おかしくないんですか？

神様は『人を造ろう』という時に・・・[我々は天地の造られる前から神に覚えられていて・・・]と新約聖書にありますよね。28:32.70

天地を造られる前から私たちは神に覚えられていて、神様は自分を、自分が、何にもない無から創造すると言うんだけど、我々はそれを受け取るけど、神様の心にはもうすでに、『我と共に汝がいる』んです。造る前から。それを神様は心に置いて、あなたという人を造った。アダムという人を使ったんです。29:06.06

だからね、神様が主語だけで 充分いいんだけど、それだけじゃなくて、あなたが造られるにあたっては、造られる人も(神様が主語であるのと重なって)、人も自分が造られることの主語でなければならないんですよ。

さあ、今日、ここ、共にいるあなたですよ。あなたが造られるにあたって、あなたの意思とあなたの協力とあなたの王権がなければ、あなたという人は造ることができませんと。神様の心がそこに現れている。

「神様が勝手に造ったんでしょ」とか、「神様は造り主で、私たちは被造物ですから。神様が好きなように造れるでしょう」と、言いますか？いえいえ、この神様の書きっぷりに現れているのは、神様はあなたという人の『意思』とあなたという『心』と『希望』と『決心』がなければ、神様はあなたという人を造れませんと。造れませんでしたということです。

ですから、とっても深く尊いんです。これがね、本当の、神の国にある人間の『尊厳』なんです。31:15.54

どうですか？初めのアダムというものがそうだったと信じて、「でも我々はそこから崩れ落ちてしまった」と？
「罪を犯した、墮落した」という、そこから聖書が、始まるんじゃないんですよ。聖書の始まりは、今言っている、ここからですから。だから、ここから、ちゃんと思い巡らしを始めないと、後がまずい。歪んでしまうんです。

だからね、墮落で失われたのは、神の聖さとか永遠の命がなくなったとか、道徳性がなくなったとか、それもあるんですけど、それだけではなくて、中心は、神と共に治める『王的使命・王権』の崩壊だったんです。

神と共に治める『王的使命と王権』の崩壊、『型崩れ』。神のいのちによる『我と汝』の関係が、単なる"善と悪をいかに知る(オイダ)"かというレベルの『我とそれ』の関係になり下がってしまったんです。

だからその結果、人は、地を治める代わりに、魂の迷い、自分の心の恐れ、肉の欲望に、治められるようになってしまった。その上、自分を自分でどう治めたらいいかもわからない。それでもって、自分の行く道を、自分のあり方を、どう定めたらいいかもわからなくなってしまふ。ふらふらしてしまふ。混沌としてしまふのです。34:10.75

だけど、そこで、しっかり『向き直る』ということ。『悔い改めよ』という言葉がある。それは『向き直る』ということ。そして、"もう昔、『向いていたところを見ない』ということ。

向き直りさえすれば、主は待っていてくださるんだから。喜んで私たちに深く迎えてくださる。その意味で、我々はしっかり、『真実』に向き合う。その『灯火』を持たないといけない。

暗闇の世界でも。「主よ、私はここですよ。私はここにいますよ。」と、灯火を持つ。「あ、そうですか。主よ、あなたは、パートナーとして私たちを見ていてくださるんですか。そしたら、そのタラント、『あなたの喜び』を私のうちで私も喜びましょうと。それを私の周りの人たちに、私は惜しみませんと。素直にわざとらしくではない。イヤイヤではとんでもない。あるがままの表現で、私は周りのあの人この人に、仕えますよ。届けますよ。

36:07.67

その時に、初めのアダムに託されていた「能力」が、アダムに託されていた神様の「期待」が、我々によみがえってくるんです。「私たちは単に、罪を赦されて"永遠のいのち"が与えられました。いつ死んでも大丈夫です」とか、「私たちは、赦されて、聖められました。」で、終わるんじゃないんです。

我々はそこからもう一度、始めのアダムに還って、我々は生き直すことができます。始めることができます。神と共に治める『王的使命』を持って、一つ一つ、自分自身も治めることができます。そして、自分の環境もです。全てを自分と主との手の中で、それを発揮することができるんです。37:30.84

はい、それでは、キングダムセミナーの本のパート4の94ページ見てください。一番上から。

【王権による関係】

5C15 回目キングダムセミナー20260314

では、それは一体どのような関係なのでしょう。『王権』といっても、誰にどのような権威を行使することなのでしょう。この質問こそ、私たちが『神の国』そのものになっていくための鍵なのです。『関係』は幾種類も存在します。38:31.80

- ・あなたと父なる神との関係。
- ・イエス様との関係。
- ・聖霊との関係。
- ・サタン、悪霊との関係。
- ・兄弟姉妹との関係。
- ・・・これらのそれぞれの関係性の中に、私たちの王的使命を使わないといけないということです。どうそれを治めていくか。どう現していくかということ。一つ一つの関係性が大事なんです。ここへいくと、ですよ、皆さん。この一個一個は、もういわゆる技術、テクニックと言ったら冷たく感じますが、あれこれ自分で練られていく生活の中のメリハリなんですよ。39:38.40

『王権』なんて言うと、なんか威張り腐って、命令して、プイプイと、ああなれこうなれって、そんな風に聞こえるかもわかりませんが、そういう風に思うんだったら、もう一度、創世紀の初めから学んだ方がいいよ。39:58.19

神様の『王権』というのは、神様がどんなにへり下り、どんなに愛し、人間の想像をはるかに絶する神様の心の発動なのです。我々はそれを受け取って、神の心で、この大自然に立っているわけです。

王権と言ったら、さっき読んだマタイの7章のあそこみたいに、[私は悪霊を追い出したのではありませんか。奇跡を行いましたよと。・・・そりゃあ、ありますよ。そういうことはありますけど、それを振りかざして、どうのこうのという、それじゃないんです。平気で、いつものようにあるという。すいすいとすんなりとです。それが我々の中に表現されていくということです。]41:27.00

だから、父なる神の関係の中に、イエス様との関係の中に、自分はどんな関係性を楽しんでるかな？と。これをみんなどう思いますか？一つ一つ思い巡らしてみてください。

神様と私、イエス様と私、聖霊と私との関係が三本柱。もう、そのところを、これまでパート4に入るまでの、このキングダムセミナーの前半でしっかり抑えてきたように思います。聖霊との関係というところも、詳しく本にはないけど、時間を使ってきたように思います。42:30.00

そして、あと大切なのは、その兄弟姉妹との関係、人と人との関係。これが25章のさっき最後の例え話の中に滲み出ていたんです。これらは私の兄弟姉妹。これらの小さいものの中に私はいるんだよと。43:02.69

それから、サタンと悪霊との関係について、これについては、この本の中には詳しく書いてないんです。なぜかという、この本を書いていた頃、この本の内容を話していた頃は、もう日本でもサタンに対することが盛んで、『悪

5C15 回目キングダムセミナー20260314

『霊の追い出し』『縛り』というのがもう結構、わいわい言っていた頃だったんです。だから改めてこれを取り上げなくても、もうその場、その場で、充分に話ができたといい頃でした。43:93.78

今どうですか？今は、やっぱり言わないとダメ？どうでしょうね。いろんな方がいらっしやると思います。サタン、悪霊との関係。でも、これね、サタン、悪霊との関係だけに特化して、詳しくなり、長けていっても、どうですか？**その他の基本的な父・イエス・聖霊との関係が、後でいいのか、適当でいいのか、信じていたらそれでいいのか？**今、パルーシアの濃厚なこの時代ゆえに、サタンと悪霊は、誰よりもそれを知っていますよ。今の時代の特徴を。だから今の時代に合わせて最も人間どもに効力のある方法で攻めようとしてきますよ。

ですから、単にサタン、悪霊との戦いにだけ、長けるという目線よりも、**しっかりと『神の国』という原典、それは何なのか、どんな呼吸なのか、どういう動きなのか、ということをしっかり自分に打ち立てることが大事です。**

だから創世紀の1章、2章、3章、特に1章2章のところで。天地創造のところで、サタンのことは、あえて書かれてないでしょ。ここにサタンがいるに違いないというニュアンスをいっぱい出しているけど、明確にサタンと言う名で語ってないんです。それは、なぜか？

神様は第三者のそれがあるのは分かっているけど、まず、ともに造り上げた人との関係性を第一に抑えたいからです。**第一にしたいのは、神様とあなたとの二人の世界なんです。**二人の世界ができてないのに。神様は、「あの敵と戦ってこい」とは言いません。

3章で、蛇がじんわりと近づいてくるんですけど、だけど、その蛇さえも創世紀のこの造られた1章の26節で地のすべてのものについて、**『"地を這う"すべてのものを支配せよ』**と言っておられる。あるいは、28節でもそう。**『地を這うすべてのものを、生き物を支配せよ』**とされているんです。47:13.02

そうしたら、蛇って初め足があったんじゃないですかという人がいてね。「ずっとお前は地をほう」と言われるということは、初め足があって足を取られちゃったんでしょという解釈もあるんです。そういう人がいるんです。面白いね。足のある蛇が描いてある中世の絵があるけどね。だけど、どちらかという、そうじゃないでしょ。

『お前は一生腹ばいで歩くんだ』と。そのまま地をほう者だったんでしょ。『地をほうものを治めよ』とされているのに。治められなかった。逆に治められてしまったんです。

だけど、イエス様の到来によって、勝利した。

イエス様のすべての行いは、神様と『我と汝』の関係性を完成するためでした。すべての人からの欺き裏切り憎悪を身に受けて。

それでも、イエス様は**『我が神、我が神、どうして私をお見捨てになったのですか』**という詩編の22編を取り上げた。詩編の22編の全部読めば最後には**『完全な勝利』**の詩編です。

5C15 回目キングダムセミナー20260314

あれは神様に愚痴を言った言葉じゃないですよ。詩編の 22 編の頭を言って、22 編全体を示そうとされたんです。それを聞く人は分かってるんです。完全な勝利を宣言をして、神様にイエス様は『完了した』と言われたんです。

何を完了したんですか？

それは人が初めのアダムにこれで還れる。天国のいのちを持てるようになる。それは、その言葉の中にそれも含まれているんですけど、いつの間にか死んだら天国へ行けるということだけ単純に受け取られてしまう。50:09.54

そこで、ローマ人への手紙の 5 章 17 節をちょっと読みますね。開ける方は開いて下さい。

[・・・ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受け入れている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。]と、パウロは言い変えているんです。・・・イエス・キリストを通して、あるいはイエス・キリストの中で、いのちの中で、その人は支配するんだと。

もう一つ、第二テモテの 2 章 11 節 12 節を読みます。2:11[私たちが彼とともに死んだのならば、彼とともに生きるようになる。]2:12[もし耐えしのんでいるなら、彼と共に治めるようになる。]・・・こう言われています。彼と共に治めるようになります。ここで注意深いのは、"もし耐えしのんでいるなら"ということばです。向き直ったからといっても、その瞬間にパッパッパッと、完全に治められるということはないです。

そこは、我々の日々のもがきと戦いの中で主と向き合い、主の王権を倣い、主の王権を使うことに、長けていくという『忍耐』が必要です。

・・・この『忍耐』という言葉は、啓示文書・啓示用語ですからね。私たちが「忍耐せよ」と言ったら、苦しい中、じっと部屋にいて、座布団に座って、じっと我慢、我慢。そのような忍耐のイメージですよ。でもこれ、忍耐じゃない。

聖書の黙示文学の『忍耐』というのは、それじゃないんですよ。苦しい中、厳しい中にあるけれど、じっと、ゴールを見て、じわ～じわと足を動かし、腕を動かし、攻めていくという、その動的な行動を忍耐というんです。

ですから、聖書のいう『忍耐』を間違えないで下さいね。じっと我慢していたら、神様が何とかしてくれるんじゃないかしらと言ったら・・・それは何とかしてくれる時もありますよ。ごく幼ない頃はそうじゃない？赤ちゃんが泣いてたら、何とかしてあげなきゃダメじゃない。親はね。でもね、ある程度学んで知って動けるようになったら、もう赤ちゃんじゃないんです。53:28.26

それから、黙示録 5 章の 10 節に[・・・この人々を王国(王)とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。]と書いてあります。この"人々の王国"というのは、ギリシャ語で『バシレイア』と言って、『神の国』のことです。ですから、ここは、『この人々を神の国とする』と言っているんです。『私やあなたがた』を『神の国』とすると言っているんです。で、彼らは地上を治めるんだよと。

5C15 回目キングダムセミナー20260314

次に、ローマ 8 章の 29 節[なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。]

・・・『イエス・キリストと同じ姿に』と、もう定められてるんだって。神様の側では、決められてるんだって。
 ・・・[神はあらかじめ知っておられる人々]というのは、天地を造られる前から、あなたを知っているということ。
 [御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは御子が多くの兄弟たちの中で、長子となられるためです]

・・・イエス様は長男。このセミナーの中で、もうはっきり出してきている『我と汝』という根源語を言ったマルチン・ブーバーのことを話てるよね。そのマルチン・ブーバーが、イエス・キリストのことを聞かれたんだって。彼はユダヤ教徒のつもり。おそらく、聞いたのはキリスト教徒だと思うけど、「あなたにとってイエス・キリストは何ですか？」と聞かれた時、マルチン・ブーバーは、なんと言ったと思いますか？マルチン・ブーバーは、「イエス・キリストは私の兄貴です。」と答えたんですって。で、それを読んだクリスチャン、それを聞いた方は、おそらく、みんな「救い主じゃ、ないんかい」と突っ込みたい気持ちを思ったと思うけどね。でも、ブーバーは、そんな短絡的な会話を彼は好まないんです。誰かが聞いてくるなら、その上をいった深い返答をしてやりたいという思いだったんでしょう。「イエス様は私の兄貴だ。」というんです。これ、どうですか。56:52.08

次に、第Ⅱコリントの 3 章 18 節。これは有名な聖句です。

[・・・栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられて行きます]・・・どうですか。初めのアダムへの回帰。初めのアダムの現われ。何も大胆な、大げさな言い方じゃないでしょ。

だからね、『信仰』とか『救い』とかいうのは、『王的使命』、『王権』に成熟していく道程なんです。プロセスなんです。信仰というのは、プロセスなんです。動的なプロセスなんです。『救い』というの、動的なプロセスなんです。

だから、この意味でも聖書は、極地としての、ゴールとしての、『キリストは来る』ということを堂々と言い切るんですよ。言い切っているんです。

単なる『パルーシア』、その『期間』という言葉ばかりじゃない。『はっきり来る』と言っているんです。まだ来てないっていうことは、『まだ完成を得ていない』ということ。

だから、『まだ来ていない』ということと、『すでに来ている』ということの、この相反すると思える緊張の中に、神の国のエキサイトがあるんです。

「ヨッシャー！今日がその日か」いう『永遠の今』なんです。アーメン！

『クロノス』のこの時間に、神の時『カイロス』を皆さんに解き放っています。互いにそうしましょう。

そして、2026 年、互いの我々のカイロスのこの時の中に、瞬間、瞬間に、神の啓示のスパークが光る『アトモス』の時を皆さんに解き放ちます。アーメン！私にも解き放ってくださいね。

5C15回目キングダムセミナー20260314

はい、じゃあ最後に進行の歌を一つ、18番を歌いましょう。

どうぞ、コメントがあったり、尋ねたいことがあれば遠慮なく電話あるいは個人ラインでつないで尋ねてください。その意味で、あなたと私は対話がしたいです。

それでは、これで3月のキングダムセミナー終わります。ありがとうございました。